



蘭学者。松山城下(現、松山市)出身。松山藩医の子として生まれる。家業の漢方医学を学んでいたが、14歳のとき京都で西洋医学に出会い、西洋医学を通して自然科学に強い関心を持った林宗は、江戸(現、東京都)の杉田玄白の門下生として蘭学(江戸時代にオランダから日本に入った西洋の学術・文化・技術)を修めた。一時、松山に帰り家督を継ぐが、その後、大坂(現、大阪府)、長崎に遊学して研鑽を積み、再び江戸に出て医者となる。文政5(1822)年に天文方の翻訳方となり、医学・薬学・地理学・物理学・化学の蘭書を勉強し、翻訳や著述に活躍する。林宗の著作の中で最も重要な一冊が、我が国最初の物理学書として高く評価され、その後の様々な学問に大きな影響を及ぼした『気海観瀾』である。林宗は、物理学の考え方が全くなかった江戸時代に分子論や引力、気象現象などについて分かりやすく

紹介した。晩年は、水戸藩に招かれ、洋学(江戸後期の日本で紹介、研究された西洋学術の総称)の啓蒙にも努めた。

略歴

安永4(1775)年	松山藩医の家に生まれる。
寛政8(1796)年	父・青地快庵の死去に伴い、家督を継ぐ。
文化2(1805)年	松山藩主に監察を命じられるが、辞退し、大坂・長崎に遊学する。
文政5(1822)年	天文方蕃書和解御用の局員に命じられる。 ゴロウニン著『日本幽囚記』の翻訳に加わり、訳書『遭厄日本記事』を完成させる。 『依百乙薬性論』を著す。
文政6(1823)年	『気海観瀾』の原稿ができる。
文政8(1825)年	『気海観瀾』を刊行
文政10(1827)年	幕府の命令で『輿地誌』六十五巻を訳す。
文政11(1828)年	林宗訳『奉使日本紀行』を刊行
天保3(1832)年	水戸藩主・徳川斉昭に招かれ、その藩医とあわせて洋学都講となる。
天保4(1833)年2月22日	59歳で永眠 (肖像画(米田眞澄筆)：『我国物理学の創始者 贈従五位 青地林宗先生伝』より)

〈関連図書〉

- ・青地林宗『気海観瀾』 1827年
- ・景浦稚桃『我国物理学の創始者 贈従五位 青地林宗先生伝』 来迎寺 1930年
- ・池田暎『青地林宗の世界－伊予の蘭学者－』 愛媛県文化振興財団 1998年

〈主な収蔵資料〉…(P194, 4)

〈ゆかりのある場所〉…(P266, 9)